教育普及

ドイツの博物館教育リポート

一條彰子

文部科学省が日本博物館協会に委託した日独交流事業[註1]に参加し、ドイツの博物館教育の現場を見る機会を得た。二〇一二年九月十三日からベルリンとゾーリンゲンに一週間ずつ滞在し、六名の日本各地の博物館教育担当学芸員とともに、美術館、歴史博物館、産業博物館、民族学博物館、子ども博物館など二十館あまりのミュージアムの教育プログラムを視察、関係者と意見交換を行った。

ドイツにおける博物館教育の歴史はさほど古くない。一九八〇年代から徐々に広がったとされ、日本と大差は無い。職員数にしても、常勤の教育担当職員は館に一人から三人程度で、大所帯を誇る英米の博物館教育部などの規模には及ばない。しかし教育プログラムの量は日本よりはるかに多い。

博物館ごとの教育事業については、派遣者による詳細な報告書[註2]がすでに刊行されているので、この稿ではドイツの博物館教育を支える人や組織などの仕組みを紹介し、その教育観について考察してみたい。

写真1「ベルリンの壁記念センター」で野外ガイドツアーを行う契約エデュケーター

写真2「ベルリン近代美術館」の常設展示室内でワークショップを行う派遣アーティスト

担う人々

ドイツには約六〇〇〇の博物館施設がある。そのほとんどで行われ、教育普及事業の柱となっているのは、ガイドツアーである。実際にガイドするのは多くの場合、博物館や支援組織と契約しているフリーランスのエデュケーターだ。教育担当職員は、部門全体の管理・運営する立場となる。

「ベルリンの壁記念センター」では、現存する「壁」に沿って野外展示を巡る予約制のガイドツアーが年間約一二〇〇回行われている[写真1]。これを行うのは、自作のコンセプト・プランによるツアー実演の審査を経て採用された、十二人の契約エデュケーターたちだ。彼らは採用後も、職員の同行による定期的な評価を受けて、そのガイドの質を保つよう努めている。

ドイツ最大の歴史博物館であるベルリンの「ドイツ歴史博物館」には、五十種類ほどのガイドツアーがある。教育部門の管理職二名のもと、二年契約の専門職である歴史系と美術系のエデュケーター十四名がガイドを担当し、教員に対する講義や研修も行う。採用は非常な高倍率で、博士号所持者も多い。

支援組織と行政

契約エデュケーターと博物館を結びつける組織もある。たとえば、四十年前に子どもの放課後支援組織としてスタートし、今では五十人以上のアーティストや契約エデュケーターをベルリンの美術館に派遣している〝Jugend im Museum e.V.〟(社団法人「若者を博物館へ」、以下JiM)だ。

四五〇〇平米の展示スペースを持つ大型の「ベルリン近代美術館」は、このJiMに五年契約で教育事業を委託している。JiMから派遣された五人のアーティストが常駐し、ギャラリーやアトリエを使って、音楽やダンスも含めた幅広いワークショップを行っている[写真2]。

「バウハウス資料館」は、教育担当職員が広報を兼任する一名のみで、アトリエも持たない。しかしJiMから契約エデュケーターが七名派遣され、多くの教育事業を行っている。たとえば保育園対象の五回連続プログラムは、初回はギャラリーで、二回目以降はエデュケーターが保育園に出向いて行う。私たちはその初回にあたるギャラリートークを視察した。触ったり組み立てたりしながら、子どもの言語活動を促すこのプログラムは、移民の多いベルリンで、母語(ドイツ語)教育としての側

面も併せ持っているとのことである。

博物館教育支援組織と連携するベルリンのシステムは、同じように人材不足や設備面で悩む日本の博物館にとって参考になると思われた。エデュケーターの交流によりプログラムの質が保たれることも利点である。日本では今、解説ボランティアの果たす役割が大きいが、今後活動を拡充するためには、フリーランスの導入も検討すべき時期に来ているのではないだろうか。もっともドイツでは、同じ業務には同じ賃金が支払われるべきという労働観があり、解説ボランティアを活用しにくいという事情もあるようだ。

行政的な支援も見逃せない。デュッセルドルフ市は、「文化リュック」という文化教育政策を五年前から掲げている。これは市の小学生全員を、「オペラに一回、美術館に一回、ダンスに一回、演劇に一回」招くものだ。子どもの頃の文化体験は、一生背負えるリュックのように貴重であるという考えに基づく。このデュッセルドルフ市と二十五年前から契約して、子どもの芸術活動を支援しているのが非営利団体「AKKI」である。市からの文化助成や建物の提供を受けて活動し、二七〇人の子どもが夏休みの三週間にわたって参加する「街づくりワークショップ」などを行っている。AKKIは同市内の「ノルトライン・ヴェストファーレン州立美術館（K20・K21）」とも良好な関係にあり、地域行政・文化施設・NPOが、時間をかけて連携を構築していった姿を見ることができる。

博物館教育が目指すもの

教育プログラムの目標は、博物館ごとに、ミッション（使命）やコレクションに基づいて明確に定められていることが多い。例えば、前述のK20・K21は「参加と能動」というテーマを掲げて、近現代美術に親しむ体験を重視している。ゾーリンゲン郊外の「リンドラー野外博物館」は、宿泊や調理を通して一九世紀の農村文化を知り保護につなげることを目標にしている。

これらの教育目標から見えてくるのは、多面的な展示や体験学習を通して、来館者に自分自身で資料を解釈してもらおうとする姿勢である。知識や情報を与えるだけではなく、来館者の博物館活用力（ミュージアム・リテラシー）の向上をも目指しているように感じる。そこには、歴史観と教育観という二つの側面が関わっていると考える。

ドイツの歴史は複雑である。一九四五年以降のドイツ史を扱う、旧首都ボンの「ドイツ連邦共和国歴史博物館」は、冷戦時代の東西ドイツの生活文化を、左右に同時進行で見られるようになっている。私たちの通訳がそうであったように、来館者には東ドイツ出身者も多く、東西の優劣を比較するといったような、単純な歴史観につながる展示は避けられている。前述の「ドイツ歴史博物館」も、その教育目標を「来館者に多様な視点を与え、来館者が歴史上のテーマについて自ら判断することを手助けする」ことと表明している。

多様な視点を促しているのは、博物館の展示資料だけではない。首都ベルリンは、さまざまな出来事の記憶や痕跡が埋め込まれた街である。国会議事堂（ライヒスターク）内の現代美術作品やホロコースト記念碑、ベルリンの壁の犠牲者のプレートなど、街を歩けばいたる所でモニュメントやアートに出会う。街自体が、歴史や社会的課題と向き合う博物館として機能しているともいえよう。

教育観については、世界的な共通理解となりつつある「キー・コンピテンシー（主要能力）」の影響が挙げられる。これは現代人には基礎学力だけではなく「変化に対応する力、経験から学ぶ力、批判的な立場で考え行動する力」も必要だとする概念で、日本でも学習指導要領の「生きる力」に反映されている。ボンで見学した、州の博物館教育者会議の基調講演も、「過去の知識を覚えることよりも、今に生きる子ども自身が歴史をどう捉えるかということが重要である」として、コンピテンシーに言及していた。

私たちの訪独の二カ月後、今度はドイツから博物館教育担当者七名が来日した。最終日の評価会では、ボランティア、未就学児教育、博学連携、学力観、博物館評価、研修、平和教育と、実に多岐にわたるテーマについて、両国の出席者で話し合った。日独の博物館教育には共通する課題も多い。この経験を今年の派遣者につなげ、さらにネットワークを築いていきたいと思う。

（企画課主任研究員）

註

1　平成二十四年度「日独青少年指導者セミナーB3」（テーマ：博物館における青少年教育）。

2　ドイツ派遣者らによる報告書は、日本博物館協会ウェブサイトよりダウンロードできる。本稿で紹介できなかった、ガイドツアー、子ども向け展示、音声ガイドなどの補助ツール、鑑賞教材、ワークショップ、流行している「誕生日会」イベントなどの教育プログラムが、博物館ごとに詳細に記されているので参照されたい。http://www.j-muse.or.jp/02program/pdf/2012BKJ_report.pdf

次号予告　2013年10-11月号　10月1日刊行予定

現代の眼 602

クローズアップ工芸
Review
プレイバック・アーティスト・トーク

2013年8月1日発行（隔月1日発行）現代の眼 601号
編集：独立行政法人国立美術館 東京国立近代美術館／美術出版社
制作：美術出版社
発行：独立行政法人国立美術館 東京国立近代美術館
〒102-8322 東京都千代田区北の丸公園3-1　電話03(3214)2561
表紙：竹内栖鳳《ベニスの月》1904年 絹本墨画 222.0×174.0cm 高島屋史料館蔵

東京国立近代美術館賛助会員（MOMATメンバーズ）
SEIKO セイコーホールディングス株式会社　鹿島建物　三菱商事